

好きなんだろう、俺の
声——深夜ラジオの
防音室で声フェチが
バレて、DJの生声で
鼓膜から蕩かされて朝まで
離してもらえませんか

ヘッドフォンの中で、あの声が笑った。

「――眠れないなら、無理に寝なくていいんですよ。俺がここにありますから」

低い。甘い。鼓膜の裏側をそっと撫でるみたいに、柊蓮の声が頭蓋の奥に染みてくる。深夜一時のFMスタジオ、副調整室のミキサー卓の前で、私は太腿をきゅっと閉じた。

リスナーに向けた言葉だ。分かってる。三十万人のうちの一人に向けた、プロの声。私に言ってるわけじゃない。

――分かっているのに。

吐息混じりの低音がモニターヘッドフォンの密閉空間で反響するたびに、下腹がじんと疼く。唇を噛む。爪をミキサー卓の縁に食い込ませる。この席は、柊蓮の声を最も近くで、最も高音質で聴ける特等席だ。ADとして座ることを許された、仕事の席。

四年間、毎晩こうだ。

彼のを流しながら、自分の身体が勝手に反応していることを悟られないように、必死でキューシートに目を落とす。声フェチ。中学の頃から低い男の声を聴くと身体が熱くなった。誰にも言えなかった。友達にも、付き合った彼氏にも。気持ち悪いと思われたいなかった。

だから――この席だけが、私の居場所だった。

CMに入る。ガラス越しに蓮と目が合う。彼はマイクから離れた途端、別人みたいに無表情になる。小さく頷くだけ。私はインカムのスイッチを押して「次、曲振りです」と伝える。声は平静。指先だけが震えている。

「了解」

たった二文字の返事が、鼓膜から背筋に降りて、尾骶骨の奥で弾ける。

(やめて。お願いだから、その距離で息しないで——)

CM明け、蓮の声がまた始まる。ヘッドフォンの中が彼の声で満ちる。溺れそうだ。溺れたい。でもここは仕事場で、私はADで、あの人は担当DJで——。

午前三時十二分。オンエア終了。

スタッフが一人、また一人と帰っていく。私は録音ブースに残った。翌週分のジングル素材の整理がある。蓮もメインスタジオに残っていた。選曲リストの確認だと言っていた。

サブとメインを繋ぐ通路を行き来しながら、機材棚のファイルを取りに行こうとした時だった。

バズンッ、という鈍い音。天井の蛍光灯がちかちかと明滅して、空調の低い唸りがぷつりと途切れた。

防音扉の電子ロックのランプが、緑から赤に変わった。

ハンドルを引く。動かない。

「——扉、開かないぞ」

振り返ると、メイン側から蓮が立っていた。低い声。マイクを通さない、空気を直接震わせる生の声。距離は三メートルくらいなのに、防音室の静寂が彼の声をやけに鮮明に運んでくる。

「電気系統のショートみたいです。守衛さんに連絡します」

インターホンを押す。深夜の守衛は一人。業者を呼ばないと電子

ロックの復旧は無理だと言われた。最短で――明け方。

二人きりの防音スタジオ。

外界の音が完全に遮断された密閉空間に、私たちの呼吸だけが落ちる。オンエア中は気にならなかった。機材の動作音やBGMが常にあったから。でも今は――何もない。彼の呼吸だけが聞こえる。

吸って、吐いて。あの声帯を通過する空気の音。低くて、かすかに湿っていて、吐息のたびに微かな振動が空気に乗って私の鼓膜を叩く。

ぞわ、と背筋に鳥肌が立った。

(やめて。今、その距離で息しないで――)

蓮はミキサー卓に寄りかかって腕を組んでいる。無口。表情が読めない。ラジオの柊蓮とは別人だ。軽妙なトークも、リスナーを笑わせる甘い声も、ここにはない。ただ無言で、切れ長の目がこちらをじっと見ている。

私はなるべく距離を取ってパイプ椅子に座り、スマホの画面を見るふりをした。画面の文字なんか一文字も読めていない。耳だけが勝手に彼の呼吸を拾っている。

防音室の沈黙は距離を壊す。三メートル離れているのに、すぐ隣で息をしているみたいに聞こえる。

二十分が経った。

不意に――蓮が立ち上がった。

足音がない。防音室の床材が音を吸って、気配だけが近づいてくる。私がスマホから目を上げた時には、もう目の前にいた。パイプ椅子の背もたれに片手をついて、私を見下ろしている。

「――桐谷」

息が止まった。

ラジオの声じゃない。マイクを通さない、加工ゼロの、生の低音。空気の振動が直接鼓膜を叩いて、頭蓋の内側で反響する。ヘッドフォン越しに四年間聴いてきた声とは――まるで違う。剥き出しで、生々しくて、声帯の震えまで聞こえる、裸の声。

「好きなんだろ、俺の声」

心臓が止まった。

比喻じゃない。本当に一拍飛んだ。蓮の目は笑っていない。ラジオの軽い微笑みも、社交辞令の柔らかさもない。無表情の中で目だけが――射抜くように私を捉えている。

「毎晩見てた。俺がトークしてる時、お前、太腿閉じるだろ。唇噛むだろ。ガラス越しでも分かる。四年間、ずっと」

血の気が引いた。

バレていた。

ずっと――ずっとバレていた。四年間、必死で隠していた。プロの顔で、平静を装って、キューシートに目を落として――全部、見られていた。

「ち、違います……っ。仕事ですから、集中して――」

「嘘つけ」

一言。低い声が鼓膜を打って、言い訳が喉の奥に落ちた。

膝から力が抜けた。触れられてもいない。声だけ。声だけで膝が笑っている。蓮はそれを見下ろして——かすかに、ほんのかすかに口角を上げた。

「……最低ですよ、私」

声が震えた。両手で顔を覆う。涙が出そうだった。

「仕事中に、担当DJの声で……こんな……」

声フェチ。誰にも言えなかった。異常だと思っていた。普通の人には声だけで身体が反応したりしない。好きな人の声を聴いて太腿の間が熱くなったりしない。おかしいのは自分だと——ずっと思っていた。

蓮の指が、私の顔を覆う手に触れた。片方ずつ、ゆっくり外される。逃がさない手つきなのに、指先は驚くほど慎重で、まるで壊れものを扱うような熱を帯びていた。

「隠すなよ」

そう言って——蓮の指先が、私の耳の縁に触れた。

「ひっ……♡」

肩が跳ねた。耳。声を受け取る器官。鼓膜に繋がる入り口。そこを、彼の指先が辿っている。耳介の薄い皮膚を、爪の先でゆっくりなぞるように。

「お前、ここを感じるんだろ。声が入ってくる場所」

親指と人差し指で耳朶を挟まれて、ゆっくり揉まれた。じわりと熱が広がる。耳から首筋へ、首筋から背骨へ、背骨から——下腹に。

「あ……っ♡ やめ……」

「声フェチが恥ずかしいことだと思ってるのか？」

何も言えない。頷くことも否定することもできない。蓮の指が耳から離れた。

ほっとした——はずだった。

なのに、離れた指の感触を耳が惜しんでいる。もっと触っていてほしかったと、身体が訴えている。

(だめ。こんなの——おかしい)

「……もう少し、業者来るまで待てばいい。何もしない」

蓮はそう言って、ミキサー卓の方に戻っていく。距離が開く。安堵するはずだった。安堵——じゃない。

喪失感だ。ヘッドフォンを外した時と同じ、あの。彼の声が鼓膜から剥がれる寂しさ。

(嫌だ。もっと聴いていたかったなんて——思うな)

太腿の間が熱い。スカートの裾を握りしめる。触れられたのは耳だけ。耳だけなのに、下着がじんわりと湿り始めている。

十分が経った。防音室の沈黙。私の心臓の音だけが耳の奥でうるさい。

「一つ、試していいか」

蓮が口を開いた。

警戒の目を向ける私に構わず、蓮はミキサー卓の引き出しからモ

ニター用ヘッドフォンを取り出した。密閉型。ノイズキャンセリング。外音を完全に遮断するやつ。

蓮がゆっくり近づいてきて——私の頭にヘッドフォンを装着させた。耳がすっぽり覆われる。外の音が消える。自分の呼吸と心臓の音だけが、密閉された空間で増幅される。

蓮がスタジオのコンデンサーマイクの前に座った。マイクの電源だけを入れる。ヘッドフォンとマイク直結。放送には乗らない。私の耳だけに、蓮の声が届く回路。

「——聞こえるか」

ヘッドフォンの中が、蓮の声で埋め尽くされた。

ラジオと同じ音質。同じ距離感。でも——声色が違う。ラジオでは絶対に使わない、低く、ゆっくりとした、生々しい声。

「今から俺が言うことを、黙って聴いてろ」

全身に鳥肌が立った。頭蓋の内側が彼の声で振動している。

「お前が毎晩、俺の声聴いてどうなったか——知ってる」

心臓が暴れ始めた。

「ガラスの向こうで足閉じて、唇噛んで、必死で我慢してたの。全部見てた」

「やめて……♡　ください……」

声が震えた。ヘッドフォンの中で蓮の声だけが世界の全てになっている。外の音がない。視覚は暗いスタジオ。聴覚だけが剥き出しにされて、彼の声に侵されている。

「仕事だから我慢してたんだろ。プロだから顔に出さないようにしてたんだろ。でもな——」

間。意図的な間。ラジオのプロが計算した、聴く者の心臓を止める沈黙。

「お前の身体は正直だった」

「あ……♡♡」

それだけで、おまんこがきゅうっ♡と疼いた。声だけで。ヘッドフォンの中の声だけで、下着の中が熱く濡れていく。

蓮が椅子から立った。マイクから離れて——背後に回る気配がする。ヘッドフォンで外音が遮断されているから、どこにいるのか分からない。

左耳のイヤークップが、わずかにずらされた。隙間から——。

「——今、どのくらい濡れてる？」

ヘッドフォン越しの声と、生の吐息が、同時に左耳に流れ込んだ。二重の声。マイクが拾った声と、直接鼓膜に届く吐息が重なって。

「んっ……♡♡」

腰が跳ねた。声を殺そうとして失敗した。甘い息が漏れた。

蓮の唇が左耳の縁に触れた。舌先が耳朶の裏をなぞる。温かくて、湿っていて、ぞわぞわと電流みたいな快感が耳の奥から背骨を伝って全身に広がっていく。

「は……あ♡♡ やっ……耳……っ♡♡」

唇が首筋に移動する。耳の下から鎖骨にかけて、唇で辿るように——ちゅ、と湿った音がした。その音がマイクに拾われて、ヘッドフォンの中で増幅されて返ってくる。私の肌から出ている音。自分が吸われている音を、自分で聴かされている。

「ん……っ♡♡ やめ……音が……聴こえ……♡♡」

首筋を吸われながら、その音をヘッドフォンで聴く。直接の触覚と、聴覚のフィードバック。頭がおかしくなりそうだった。

蓮が唇を離した。

「——本気で言ってるなら、止める」

静かな声。低い声。選択権を私に渡す声。

答えられなかった。「止めて」と言えない。「続けて」とも言えない。黙って、ヘッドフォンの中で蓮の呼吸音を聴いている。

十秒。二十秒。防音室の沈黙。

蓮は動かない。待っている。

涙が一筋落ちた。恥ずかしさじゃない。悔しさでもない。

「……どうして」

声が掠れた。

「気づいてたのに、何も言わなかったんですか。四年間」

蓮が私の前にしゃがみ込んだ。見上げるような姿勢で、私の目を覗き込む。

「言ったら逃げるだろ。お前が」

「……」

「声で感じてる自分が気持ち悪いって、ずっと思ってたただろ。俺がそれを指摘したら、お前は番組を降りる。そしたら——お前の声が聴けなくなる」

「……私の、声？」

「お前も気づいてないのか」

蓮の目が真っ直ぐに私を見た。

「CM中にインカムで次のキュー出す時の声。原稿読み合わせの時、小さく笑う声。——俺が聴きたかったのは、お前の声だ」

世界がひっくり返った。

声のプロが。声で食べている人間が。何十万人のリスナーの声を毎晩浴びている人間が——私の声を「聴きたかった」と言っている。

（この人が——私を、選んでくれた）

蓮の手が私の膝に触れた。スカートの裾を軽く押さえるように。指先が太腿の内側に滑り込んで、触れた瞬間の体温差に皮膚がぴりっ♡と粟立った。

「あっ♡♡」

腰が跳ねる。蓮の指が太腿の内側を撫で上げて——下着越しに触れた。

ぬる♡